

---

# なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

コンフェクト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

### 【Zコード】

Z96700

### 【作者名】

コンフェクト

### 【あらすじ】

僕の大好きなゲームの大好きなキャラが目の前に実現化しました。これは一体、どういうことでしょう。これは神のお導きですか？いや……普段の行いが良い、僕の努力の賜物ですね！……ごめんなさい、調子抜きました。でも、ハイテンションになるのも仕方ないじゃない。この状況、最高に嬉しいんだから！

## 出合いは突然に

きっと、人生の中で一度は思つだらう。ああ、こんな子が現実にいたらしいのに……と。

それは例えばTVの中で活躍するような有名女優だったり、アニメのキャラだつたり。

僕の場合はその対象がゲームのキャラクターだ。

「ええっと……リリカル♪」

もし、自分の田の前に、『さつきまでプレイしていたRPGのキャラが三次元化』それていたら……あなたはどうします？　どうしますよ？

そう、僕の田の前には女の子がいた。

四畳半のそれなりに汚い部屋の真ん中にぽつんと、お尻と両手を下につけたポーズで。

白磁を思い起こさせるきめ細やかな肌と、徹底的に美と可愛さと萌えを追究させたようなスッとした顔立ち。その顔についた大きな蒼い目をぱちくりさせている。

銀色と水色の中間を表現したような流麗なロングヘア。黒い布服の上に羽織る形で純白のローブに身を包んだその姿はまさにファンタジーのキャラそのものだ。

「あ

辺りを見回した彼女は部屋の中で佇んでいた僕と田が合つ。

僕はといふと、震えていた。

それは恐れから来る物ではなく、ましてや体調不良などから来る震えでもなく。

ただ純粋に、僕は感動していたのだ。感動に打ち震えていたのだ。

「く、く、くへへ」

「く？」

自然と口から漏れ出ていた僕の声を拾つよつて、目前の美少女が口を開く。

「く、クレアたあああん！」

「う、うわあつ！？ もやあああつ！？」

僕は目の前の美少女に飛びついで抱き付いた！

そしてそのまま腰に手を回し、彼女の顔に自分の顔を近づけ、強引に唇を

が、彼女の右手から繰り出された高速の右ストレートが僕の顔面を捉え、そのまま意識はどこかに飛んだ。

## 彼女は暴力的

「うわ、僕は氣絶してたらしい。顔の表面が焼けたようにヒリヒリする。

田を開けた僕に最初に飛び込んできた映像は見事麗しい美少女だった。

心配した顔で僕を見つめている。

ああ、よく見るとクレアたんじゃないか。僕の好きなゲーム、『レイド・オン・サタン』に出てくる美少女武闘家。といふことは、これは夢か。まさか夢にクレアたんが出て来てくれるとは。今まで何度も見ようと思つても出て来てくれなかつたのに、初めての経験だ。

よし、このまま夢の中で彼女とくっくっくほぐれつ

「あ、起きた？」

風鈴が鳴るよじに美しい声が響いた。

やけにリアルだ。まるで本当に田の前にクレアたんが居るよじに

「うう、本当に居るしー。」

僕は歓喜の声を上げて体を起こした。そうだ、さつき突然僕の部屋に現れて、僕は殴られて。

……といふことは、これは現実じゃないか！ 田の前にいるのは本物のクレアたん！ マジですか！？

「あの、とにかく状況を説明しなきよな。ここはだいなのよ。そしてあなたは誰？」

クレアたんは困り顔で溜息を吐き、僕に問いかけた。

僕は興奮冷めやらずまま、自分が高校生男子であること、ここが日本であること、クレアたんがゲームのキャラであることを簡素に語った。

彼女は終始困惑の表情である。よくわからないことが多いのだろう、当たり前か。僕も興奮と困惑が入り交じって訳のわからない状態だ。

「牧場泰三／＼マキバタイゾウ／＼タイゾーね」

「つづつ！」

クレアたんが僕の名前を読み上げた。すごい、名前を呼ばれているよ、僕。クレアたんに名前を呼ばれているよ。

僕の顔はきっと赤くなっていることだろう。浅名詩織ボイス（クレアたんの声優さん）だよ！？ その透き通るような纖細な声で今、僕自身の名前が呼ばれている！ これだけでご飯十杯はいける！

「な、なんでそんな恍惚の表情を……。あ、あたしも自己紹介しないとね。あたしの名前は」

「クレア・リフィール、十七歳。身長百六十三センチの体重は四十八キログラム。スリムな体型だけ出るところは出てる僕好みの体型！ 好きな食べ物はプロフィールだけで聞くと太った人間であるという印象を抱かれやすいピザ！ 特にチーズとトマトをふんだんに使った物が好み！ 血液型はA B型で、特技は硬貨を指で曲げるのこと。スリーサイズは上からハニー、ジジューつきゅ」

刹那、饒舌にクレアさんのプロフィールを語っていた僕の輪郭間際を凄まじい風圧が駆け抜けた。その原因は彼女の空を切る拳によるもの。

ていつか僕の判断があと一歩遅かつたらまともに食ひりついていた。

「あ、あっぶな！ また氣絶したらどうするの！」

「その方があたしにとつて最良の結果だと想つわよー！」

クレアさんのつり上がった瞳が僕を真っ直ぐに睨み付けている。高校一年生にしては童顔だと言われる僕の顔が潰れてしまつじゃないか。

クレアさんに殴られるのは嬉しくもあるけど、もつ少しだけ手加減してもらいたい。

「つていうか、あんたって危険人物でしょ！ 紛れもなく！ さつきもいきなりあたしに抱き付いてきたし！」

「失礼な！ 僕は至つて安全だよ！ 二度の飯よりクレアさんが好きなだけの存在だよ！」

「あんたの中での安全の基準が知りたいわよー！」

彼女は徹底的に僕に敵意の目を向けていた。隙あらば殴られそうだ。

仕方ない、いきなりこうして僕の前に現れたのだから、戸惑いでいっぱいだろう。僕自身もこの状況には心底びっくりなのだから。と、とりあえず、彼女に現状を理解してもらわないと。

## がんばればく

「つまり、あたしはこれの中に出でてくる登場人物つてことね

クレアたんはゲームのへつていた箱を見つめながら呟く。

このゲームはパソコンゲームである。ジャンルはRPG。

戦士、武闘家、魔法使い等の職業の中から一つを選び、その職種の人間が広大な世界を旅して魔王を倒すという単純明快なゲームだ。ちなみに仲間はおらず、ずっと最初から最後までキャラクターは一人で戦い抜かないといけない。

「うん。ほら、箱にも描かれてるし、説明書にも載ってるでしょ？」  
「本當だ……」

クレアたんは納得出来なさそうな顔で眉を潜めている。自分が異世界にやつてきたという現実を直視出来ないみたいだ。

二次元から三次元。にわかには信じがたい転移である。

「はあ、なんでこんなことになったのか……わけがわからないわ

クレアたんは右手で頭を抑えて嘆ぐ。

凜々しい姿も良いけど、悩みに悩むクレアたんの表情もたまらなくいいなあ。

「いや、でも理由にはちょっとだけ心当たりがあるよ  
「へえ？ 聞かせなさいよ

僕はドヤ顔で告げることにした。

「毎日毎日、片時も忘れずに『クレアたんと恋人同士になれますよう』に』って願つてたからだと思うよ！」

「そんなのが理由になるかあつー！」

クレアたんの右腕が、今までにない最高レベルの勢いで僕の顔めがけて飛來した。

今の威力は恐らく、作中に登場するモンスターであつてもノックアウトするレベルだ。

先ほどの経験が無ければ、たぶんまともに食らつていた。

「ぐ、クレアたん、照れ隠しだからつて、その攻撃は僕が死んじゃうよ」

「どんだけポジティブなよあんたは！ 照れ隠しじゃないし！

微塵もその氣無いからー！」

「えつ……嘘でしょ……？」

「なんでこの世の終わりみたいな顔してんのよー！」

僕は思案する。もしかして……クレアたんはあまり友好的じゃないのか？

『好き好き大好き、タイゾーくん』て感じじゃあ……、ないのか？

ていうかもとよりクレアたんは人に好意をストレートに表現するタイプではない。どちらかといふとシンデレラだ。

だから普段は暴力的な感じが続くんだが。言葉にもトゲが多い。僕に危険が振りまかれることが多い。

「だがそれがいい！」

「……」

一ヤリと微笑む僕。

見るとクレアたんは汚物を見るような眼差しを向けていた。顔も呆れている様子だ。

「く、クレアたん？ 怒っちゃった？」

「通り越したわよ。はあ、もういいわ。……てか、その『たん』ってのは何なのよ。呼び捨てでいいわよ」

クレアたんから呼称の許可を頂いた。呼び捨てでいいらしい。  
……呼び捨て……だと……？

「クククレレ、レ、レ」

クレアたんを呼び捨てで呼ぼうと頑張る僕。声は震え、肩は竦み、全身が悲鳴を上げる。頑張れ、頑張れ、あと、もうひとつ

「うわああ！ 恥ずかしくて言えないよ！」  
「なんで！？」

クレアたんが田畠で驚く。僕はあまりの恥ずかしさに悶えていた。クレアたんを呼び捨てで呼ぶなんて……思いつきで意識してしまう。

そんなこと、僕には耐えられない。恐れ多すぎで、嬉しそうでつづく。

「そ、その、やつぱり『クレアたん』のままがいいよー。クレアたんを呼び捨てで呼ぶなんて、脳みそがとろけそうだよー！」  
「あんたプロフィール語つてたとき呼び捨てだったわよねえーー？」

僕は沸騰する脳内をなんとか抑えようと必死で転げ回る。クレア

たんは転げ回る僕を見て『ヒライとこうにあてしました』と言った  
げな顔をしていたが今はどうでも良かった。

クレアさんがやつてきたのだ。これで僕の一生の幸せは確保され  
たようなもの

「お兄ちゃん」

そのとき僕の部屋のドアが開いた。  
そこには、僕の妹のミリが立っていた。

## 妹、登場

僕の妹である牧場御代はドアを半開きにしながら固まっていた。理由は単純明快。彼女の視線は思いつきりクレアたんに釘付けだつた。

「お、お兄ちゃんが……」

わなわなと体を震わせるミコ。その顔は驚きを隠せていなかつた。ミコは中学三年生である。背丈は平均のそれより小さく、頭の高い位置に短いツインテール。灰色のスウェット上下に身を包んでいた。

「モテなさすぎるからって、つこにコスプレイヤーのデリールを呼んだあーー！」

「お、おい待て妹よー！」

叫びながら全力で走り去りつつする妹を咄嗟に引き留め、その場に立ち止まらせる。どうやら妹はむちゅくちゅく誤解している模様だつた。

「お兄ちゃんがそんな不純なことをするわけがないだりつー」「ゲームの女の子が好きな時点でもう不純だよー！」

よくわかつていらつしゃる妹だつた。…………じゃなくて！

「別の発想は無いのか。もしかしたら、彼女、とかかもしれんだろ

「う

「そんなのお兄ちゃんに出来るわけ無いよ。」

「うう……」

〃πの言葉は大きな釘となり、僕の心臓に突き刺さつた。ぐ、悔しくなんかないもんねっ！

つていうかなんでデリ ルなんて単語を知つてているのか謎だ。最近の若者は学習が早くて怖い。

「じゃあ、なんなの、あの人。お兄ちゃんの愛してるキャラみたいだつたけど」

「それがな、聞いて驚くなよ、〃π。なんと本物のクレアさんがウチにやつて来てくれたんだ！」

興奮して声が高鳴る僕。それを聞いた〃πの目の色がすうっと消えていく。

「……お兄ちゃん、そんなに生きる」ことが辛かつたんだね。受け止めようよ、現実を。確かに嫌なこともいっぱいあるかも知れないけれど、その分良いことだつて、たくさん、あるよ。お兄ちゃんが何か悩んでるんだつたら私が聞くし、出来ることだつたら助けたり力になるよ？だからあまり一人で悩んだり思い込んだりしないで、私に助けを求めてね、お兄ちゃん」

まるで鬱病患者を慰める際に見せるような顔をする妹だった。完全にイツちゃつてる人扱いされていた。

そんな〃πに僕は事のあらましを語ることにした。ゲームを終えたら傍にクレアさんがいたこと。僕のテンションがマックスなこと。始めは信じていなかつた〃πも、僕の力説に嘘はないと感じたの

か、どうにか状況を説明する」ことが出来た。

「ゲームの中から、出て来ちゃったってこと……だよね？」

「うん、その通りだな」

「それで、お兄ちゃんはどうするの？」

「どうしよう。クレアさんが来てくれて舞い上がりっていたものの、よく考えるとこの先、どうしよう。

大好きなクレアさんが来ててくれた訳だけど、なんか問題も多い気がする。

この世に存在しない人がやってきた。言葉にすると簡単だけど事態は深刻な気がしないでもない。

まあ、僕は幸せだから無問題なんだけれどね。

「ゲームの中に、送り返せないの？」

「そんな通販の返品のよつに言われてもなあ。…………どうやって

？」  
「…………」

妹が腕を組んで悩んでいた。数刻考えた後、ハツと閃いたよつこ  
顔を上げる。

「パソコンの画面に、ぶつこむ」

「随分と抽象的だな、おい」

「だつてそれしか考えられないよ！」

むーとむくれる妹。まあ僕も案は出でないわけだけど。

そういうえばクレアさんが出て来たのは画面の中からじゃないはずだ。僕はすっとモニターに対面していたし。

ゲームを終えて、気づいたらそこにいた、という感じだった。

「と、とにかく私も会つてみるよ、クレアさん」「んじゃ、行こうか」

「こりあーだこーだと話していくとも埒があかない。僕達はクレアさんの待つている、僕の部屋に戻るのだった。

## 妹、絡む

「じー……  
「じー……

「……あの、あんたたち何やつてるわけ?」

僕とミリは扉の縁からそれぞれひょいと顔を出し、クレアたんを舐めるように見つめていた。

「その子は?」

「あ、ええと。私、お兄ちゃんの妹で……牧場御代って言います。  
よろしくお願ひします」

誰なのかと尋ねるクレアたん。それに対しミリはいたぐ丁寧に切り返していた。

その礼儀正しい姿勢に感銘を受けたのか、クレアたんはニーッコツと笑いながら応対する。

あれ、なんか僕の時と大分、対応に違いが見られるような気がするんだけど。

「なんでも、ゲームの世界からやつてきたそうですね?」

「ええと……そうなるのかな。信じたくはないけれど……」

ミリが質問をする。溜息を吐きながらも、クレアたんは現状を受け止めている模様だった。

クレアさんの話によると、冒険の最中に気づいたらここに来ていたらしい。

その最中というのが、僕が先ほどまでゲームをプレイしていた部

分と同じであつたため、どうやらゲームの中から抜け出でたのは間違いないようである。

「やつぱり、僕の愛が起こした奇跡に違いないね！」

「ねえ、ミツチャさん。あなたのお兄ちゃんていつもいつもなの？」

「はい。クレアさんにぞつこんの、現実と妄想の区別がつかない変態野郎です」

高らかに喋る僕。なんだか妹とクレアたんから冷たい目線が飛んでこるような気がするけれども、気にしない。

「でも、お兄ちゃんがこうなつちゃつたのにも訳があつて……。お兄ちゃんは昔、女の子に酷い振られ方したんです。その頃のお兄ちゃんはすくなく病んで……どうしたらいいんだろうと思つていた私は、誕生日にゲームソフトをプレゼントしたんですけど。そしたらそのゲームに出てくる一人の女の子…………つまり、クレアさんに大はまりしちゃつて。それからです、お兄ちゃんが現実の女の子を見なくなつたのは」

淡々と語る妹にクレアたんはなるほどと粗糙を打つていた。

ああ、そういうえばそんなこともあつたな。しかし僕は今、クレアたんというパラダイスを手に入れているから無問題だ。

「……ソ、そ、そつだ！　よく考えたらクレアさんが全部悪いんだ！　クレアさんなんてキャラがいるせいでお兄ちゃんは一次元の女の子を愛する体质に……許さないよ…」

「え。ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　それは逆恨みつて奴でしょうよー？　私に悪いところ何も無いじゃないー！」

「クレアさんが魅力的なのが悪いんだよー！」

「あたしにどうしろってのよー？」

「お、おこおい。一人ともその、落ち着いて……」

なんか一人が険悪なムードになつていて。さつきままで「じい和やかな雰囲気だつたのに。

「あんまりふざけた」と言つてると、女の子であろうと容赦しないわよ?」

クレアさんが物凄い形相で拳の骨をぼきぼきと鳴らしていた。その様子にミコは一瞬だけ身をくわばらせても、ふつと得意な顔でクレアさんを見据えた。

「ふつふん、いいのかな?」

「な、何がよ」

「もし、ここで私が大声を出してみたりしたら、どうなるかな? 人がすっ飛んでくるよ。そしてクレアさんはこの世の人間じゃない、謎の、未知の人間だよ? そんな人がおおっぴらに暴れたりしたら、どうなるかなあ。クレアさんはこの世界じゃ戸籍も何もないわけだから、保証も何も無いし、奇異の目に晒されるよ。そして挙げ句の果てには学会の研究所へ……ふふふ

「う、ううう……」

お、おお。なんか腕力では圧倒的に負けてるはずの我が妹が押しているぞ。

「どうしようってのよ……。あたしには魔王を倒すつていう使命があるんだから、あなたたちには構つてられないの。早くゲームの中とやらに戻してよ」

「そうだよ、お兄ちゃん。早く送り返そつよ。お兄ちゃんの衛生上も良くないよ」

ミヨとクレアさんの意見が一致していた。どうやら、クレアさんは早急に戻さないといけないみたいである。舞い上がっていた僕の心は見事に打ち砕かれた。

いや、でもせっかく来てくれたのだし、「うつむ。

「同居って形は……ダメ？」

『ダメ』

ミヨとクレアさんの声がシンクロした。僕の意見はまるで通りませんでした。

## 出たり入ったり

「なあ、ミツ。馬鹿なことを聞くかも知れないけど……」

「うん、お兄ちゃん」

「クレアさんは、どこに行つた?」

ゲームを起動した途端、クレアさんがどこかに消えた。

僕はクレアさんがどんなゲームから飛び出してきたのかを教えようと、パソコンの前に座つて『レイド・オン・サタン』を起動し、セーブデータをロードした直後『気づくと隣で見守っていた』クレアさんが消えたのである。

僕とミツは辺りをぐるぐると見回すが、どこにもクレアさんの姿は無く、『よく普通の僕の部屋であるだけだった。』

「ゲームの中に戻っちゃったんじゃない? それかもう夢だよ、私は夢を見てたんだよ」

「いや、そんなわけあるはずないよ。だってこの顔の痛みがすごくリアルなんだ。さっきクレアさんに殴られたという事実が、本物である証拠だよ」

「悲しい現実の見据え方だね……」

僕にはしつかりとクレアさんにぶん殴られた記憶と痛みがある。転んで打つた訳でもないし、電柱に顔をぶつけたとかいうオチでもない。

一体、クレアさんはどこに消えてしまったのか。僕とミツは顔を見合わせる。

そして一人してパソコンの画面に目を吸い寄せる。

「画面の中には3Dで表示されたクレアさんが居た。広大な野原に丘がぽつぽつと点在するフィールド。その中にクレアさんは立っている。

周りには少数のモンスターがうろついていた。主にスライムのような軟体性の敵や小型の鳥の敵。要するにワールドマップといつ奴だ。

「それに、僕とミリが同時に夢だか幻覚だかを見るつて、ありえないね?」

「まあそれはそうだね」

謎は深まるばかりだった。とりあえず僕とミリは部屋の中を捜索することにした。

押し入れのフスマを開けて中を覗いたりしてみるが、やっぱりクレアさんの姿はない。

「PC箱の中にもいないよー、お兄ちゃん」

「お前探す気無いだろ!？」

妹のやる気がゼロだった。縦一十センチ程度のPC箱にクレアさんが入るものか。

僕は思案する。一体、彼女は何処へ。消えたのは、ゲームを始めてロードをした時辺り。現れたのは、ゲームを終えたとき。

そこから導き出される答えは

「まさか」

僕はもう一度パソコンの前に座り、ゲームのコントローラーを手に取った。

適当にその場でセーブをして保存し、ゲーム自体を終了させる。  
そして僕とミリは部屋の中をぐるりと見渡す。

『あ

僕とミリは一人して間の抜けた声を上げていた。  
見てみると部屋の真ん中にちょこんど、正座して座っているクレアさんがいた。

目をぱちぱち開閉しながら、きょとんと佇んでいる。現状に認識が追いついていない、という様子だった。  
クレアさんが、クレアさんが、戻ってきた。

「く、クレアたああああん！」

「せいつ」

「オウフッ！」

クレアさんは真顔で正拳突きを繰り出し、僕のボディーベーグルにこんだ。

飛びかかった僕はその場で膝を付き、お腹の激痛に身を悶えながらその場に沈み込んだ。

大変痛い。けれどもクレアさんが戻ってきたという事実の嬉しさの方が勝っていた。

「あ、あれ？ クレアさん、戻ってきたの？」

「…………そうみたい」

彼女曰く、元の世界（RPGの中）に戻つて安心し、まあ冒険の続きをするだといふところが氣づくとこっちに来ていたらしい。  
やっぱりそうだった。要するにクレアさんはゲームをやめると、いつかに来る。ゲームを始めると、消える。

つまらゲームをプレイしてこの間は向いりで生きてこないといな  
る、どこかとなのだから。

「要するに、あたしつてタイゾーの掌の上……？」  
「やつこつになるとこなるね」

クレアたんはその事実を知ると、頭を抱えて唸りだした。  
感動しているんだね。これからは僕の意志でクレアたんを召還  
したり出来るわけで、こつでも念えるところ」と。

「僕は今最高に嬉しい気分だよー。」  
「あたしは最高に泣きたい気分よー。」

僕の夢は瓜がつまくつていた。

「あ、クレアたんのセーブデータをこっぽい作つたら、ハーレム状  
態に出来ないかな……」

「ならな」と思つよ、お兄けやん……」

## 家族の絆

「どうわけで、」こちらがゲームの中から飛び出してきたやつたクレアたん

「あらまあ

クレアたんを紹介することにした。

「ちはお父さんが海外勤務のため家にはいない。そのため手始めにお母さんに紹介することとする。

ゲームのキャラだと聞いて少しばかり面食らっていたお母さんだけども、大して驚く素振りはなさうである。

「えつと、クレアです。よろしくお願ひします」

「はーい。仲良くしてくださいね」

大きく微笑むお母さん。元々細い目がより一層細くなる。

天然パーマが掛かっているんじゃないかというふわふわとした長髪。

癒し系という表現が正しいゆるふわ系の母親である。

「お、お母さん？ 驚かないの？ 変だと思わないの？ お兄ちゃんのゲームから出て来たって、言つてゐんだよ？」

ミロは信じられないといった様子で語りかける。

異次元からのお客様が来たという事実にお母さんはまるで動じる姿勢を見せず。

「えつと…………それが、どうして驚く」となるのかしら？」

何が問題？　といつ感じで首をかしげるのだった。

「いいかしら、みーちゃん」

みーちゃんなどいのはお母さんがミリを呼ぶ際の呼称だ。お母さんは腰をかがめて田線の高さをミリに合わせると、真面目な口調で言葉を発する。

「この世にはね、超常現象がありふれているのよ。有名な物だと神隠しつていうのがあってね。現世と別の世界があると仮定して、時空の歪みに人間が取り込まれたりする可能性が示唆されているの。科学が進歩したとはいえ、世界に広がる様々な謎は未だに解明出来ていないものなのよ。だから

」

お母さんはより一層真面目な顔つきでミリを見つめて言つた。

「つまり、ゲームからこきなり人が飛び出しても

まる

で不思議なことではないのよ」

「いや、思いつきり不思議だよ！」

ミリは冷静な意見で反論していた。

そこで頭を縦に振るような人が悪徳商法に騙されるのだろうな、と僕は内心思った。

「それでも泰二、羨ましいわね。まさかゲームのキャラクターがこっちに来るなんて……。お母さんもね、昔に流行っていた漫画のキャラクターが好きで好きで。出てこないかなって、何度も思つたものよ。」

お母さんは昔を懐かしむように語り出す。

頬に掌を当てて心なしか惚氣でいるみつに見える。

「やっぱ、アンドウ様が出てこなかつたから……私はお父さんと仕方なく結婚しちやつたのよ」

仕方なく結婚すんなし。

クレアたんとミコは「」の親にして「」の子ありだーーー」と叫ぶたげな顔をしていた。

お母さん的好意でクレアたんに料理を振る舞つ「」になつた。  
僕がクレアたんはピザが大好物だよと言つと、「」の世界にもピザがあるんだ」とクレアたんは喜んでいた。  
木造テーブルの四席に僕とクレアたんが向かい合つて、僕の隣にミミ。ミミの対面にお母さんという布陣だ。

「前にピザ作り教室でちょっとだけ習つたことがあるんだけど、上手く出来ていなかつたら」「めんなさいね

「いえ、すごく美味しいです！」

クレアたんは上機嫌でピザを口に運んでいた。嬉々としたクレアたんの顔がたまらなくかわいい。

とりと溶けたチーズがたっぷりとパン生地に乗つており、アクセントを加えるように刻まれたトマトがちりばめられている。

ゲームの世界から来た彼女だけビ、JUGの世界でも食事は出来るようだ。

「セリューバー、ミコ」

「ん？ 何、お兄ちゃん」

「RPGの世界ってトイレとか見かけないけど、クレアたんてウ

「するのかな？」

「知らないよ！」

僕は眞面目な疑問を隣にいたミコにぶつけただけビ、一蹴されてしまつた。小声だつたのでクレアたんとお母さんには聞かれていなイ。

それ以上そのことについて考えたら本氣でセクハラ、変態だとミコが言つて僕は渋々とその疑問を頭から遠ざけた。

「賑やかそうな家庭ですね」

「そうね、うちはお父さんが遠くに出ているけれど、大きな家庭問題も無いし、安泰ね。クレアちゃんの家族はどんな感じなのかしら？」

?

お母さんは何気ない質問をクレアさんに投げる。

僕は一瞬、その質問は止した方がいいと感じたが、クレアさんが特に氣負つて居る風でもなく語り始めた。

「両親は、他界しています。後は弟が居るんですけど、弟はその姿を消してしまつて、失踪中なんです」

「あ……」

少しだけ顔に陰りを浮かべて話すクレアさん。

その内容にお母さんは「めんなさい」と頭を下げるが、いえいえと

クレアたんは顔を上げて気にするでもなく話を続ける。

「魔王を倒せば、王国軍の方々に探してもらえることになっているんです。魔王を倒す旅、そして弟を捜し出す旅でもあるんです。本当は、弟を捜すことが目的で、魔王を倒すのは一の次……って言つたら、あれなんですけど」

クレアたんは自由都市クロティアという街で弟と一緒に暮らしだったという過去がある。

突如失踪してしまった弟リックを探すため、そして魔王を倒すという目的がクレアたんのストーリーであるのだ。

「あたし、急にすごい力を手に入れたんです。それこそ、モンスターを次々に倒していくような大きな力を。そしたら何故だか私の頭の中に聞こえてきたんです、『マオウヲ、タオシテ』って。神様のお告げなのかも知れません」

そう、クレアたんはある日、強大な力を手に入れたのだ。  
クレアたんは元々武道を習つていて強かつたのだけれど、それでも女性である彼女に強さを求めるのには限界がある。

そんなクレアたんはある時、信じられない強さを手に入れる。大の男であろうと容赦なくぶちのめし、凶悪なモンスターであろうと難ぎ倒す常識を逸した能力を。

「だから、あたしは絶対に弟を見つけて、魔王を倒すんです。そのためにはこの変た……タイゾーくんの力が必要になるわけです」

クレアたんはぐつと拳を握りしめて言つ。そう、ゲームのキャラクターである彼女が、目的を成し遂げるにはプレイヤーである僕の力が必要不可欠となるわけだ。

「なら、きっと問題ないよ」

ミロが満面の笑みを浮かべて喋っていた。

「お兄ちゃんはクレアさんを動かすことににおいては一流だと思つし。一度ゲームをクリアしたこともあるみたいだし、クレアさんの目的は絶対に達成出来るよ！」

ミロの心強い一言で、談笑するクレアたん達。

その中で一人だけ、僕は心の底から笑えていなかつた。顔がひきつっていたかもしれない。

血の気が引く、というのはこいついう感覚なのか。もしくは背筋が凍り付くという感覚か。

クレアたんはゲームのキャラクターであり、その生き様はゲームのストーリー。

それを動かすのは僕。彼女の行き先を決めるのは、僕自身。

それらを踏まえて全てを考えたとき…………僕は彼女がやつてきたという現状の側面を、思い知ることになるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9670u/>

---

なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

2011年9月20日04時21分発行